

犀川大橋

さいがわおほし

戦災に遭わなかった加賀百万石の金沢市は、城下町特有の鍵の手道路や行き止まりが多く、複雑でわかりにくいといわれる。しかしお城と兼六園の位置する小立野台こたつのをはさんで、南東から北西に平行して流れる犀川と浅野川、それを横に貫く北国街道（現国道159号）の基本構造をおさえておけば、多少、道に迷っても心配はない。この幹線道路との関係で、北の卯辰山麓うたつやまの寺院群や南の寺町寺院群が配置され、武士や町人の住みわけがなされた。

北国街道にかかる犀川大橋と浅野川大橋は、文禄3年（1594）前田利家の命によって架設された。犀川大橋は福井を経て京都へ、浅野川大橋は富山を経て江戸に至り、両橋はそれぞれ金沢市の南北門を構成していた。

大正8年（1919）、老朽化した犀川大橋は路面計画にあわせて、それまでの木橋にかわり6径間の鉄筋コンクリート製の桁橋に架けかえられた。しかし3年後の11年、大雨による出水で破壊された。あらたに架設されたのが、犀川をひとまたぎする今日の犀川大橋である。大正13年（1924）7月の竣工。

現在、橋梁美化事業や修景事業が盛んだが、犀川大橋の「化粧直し」は、全国的にみても橋梁修景事業の先駆けのひとつである。

鉄の橋は、錆びないように最低10年に一度ぐらいの割で、ペンキが塗りかえられる。色は、ふつう役所の担当者がしかるべく決めてしまう。だが今から10年前の昭和59年（1984）、犀川大橋の還暦祝いをおかね、市民へのアンケート調査をもとに橋の色が決められた。採用されたのが、“やわらかい黄緑色”。

「化粧直し」は、その後、浅野川大橋でもおこなわれた。テーマは、橋の復元的修復事業である。大正12年3月に竣工した浅野川大橋では、最近行なわれた修景工事のさい、なるべくむかし通りに復元するため、古い図面はもちろんのこと、古い写真も集められた。橋は、3連の楕円アーチの鉄筋コンクリート橋だが、アーチ・リングには、御影石がはられている。スパンドレルとよばれるアーチ壁面は、白線の縁どりのある薄茶色で、大正ロマンの彩りを感じさせる。

黄緑色になってからほぼ10年を経た平成5年、犀川大橋の「化粧直し」が再びおこなわれた。今回採用された色は、シックな城下町にあうように、濃淡3段階に塗り分けられた水色である。視線が上に移動するにしたがい、あたかも青空にとけ込むかのように水色が淡くなる。あわせて歩道の拡幅工事もおこなわれた。歩道がせまかったので、平成5年度、下流側に歩道が設置され、6年度は上流側が施工された。

町なかを歩いていると、橋の袂や道ばたに文学碑が目につく。なかでも室生犀星と泉鏡花は、金沢を代表する作家である。犀星は男性的な犀川を、鏡花は女性的な浅野川を作品のなかに描き込んでいる。古い城下町のなかに、近代の橋と文学がしっかりと息づいているようだ。

〔IT〕

竣工年月：大正13年（1924）7月10日

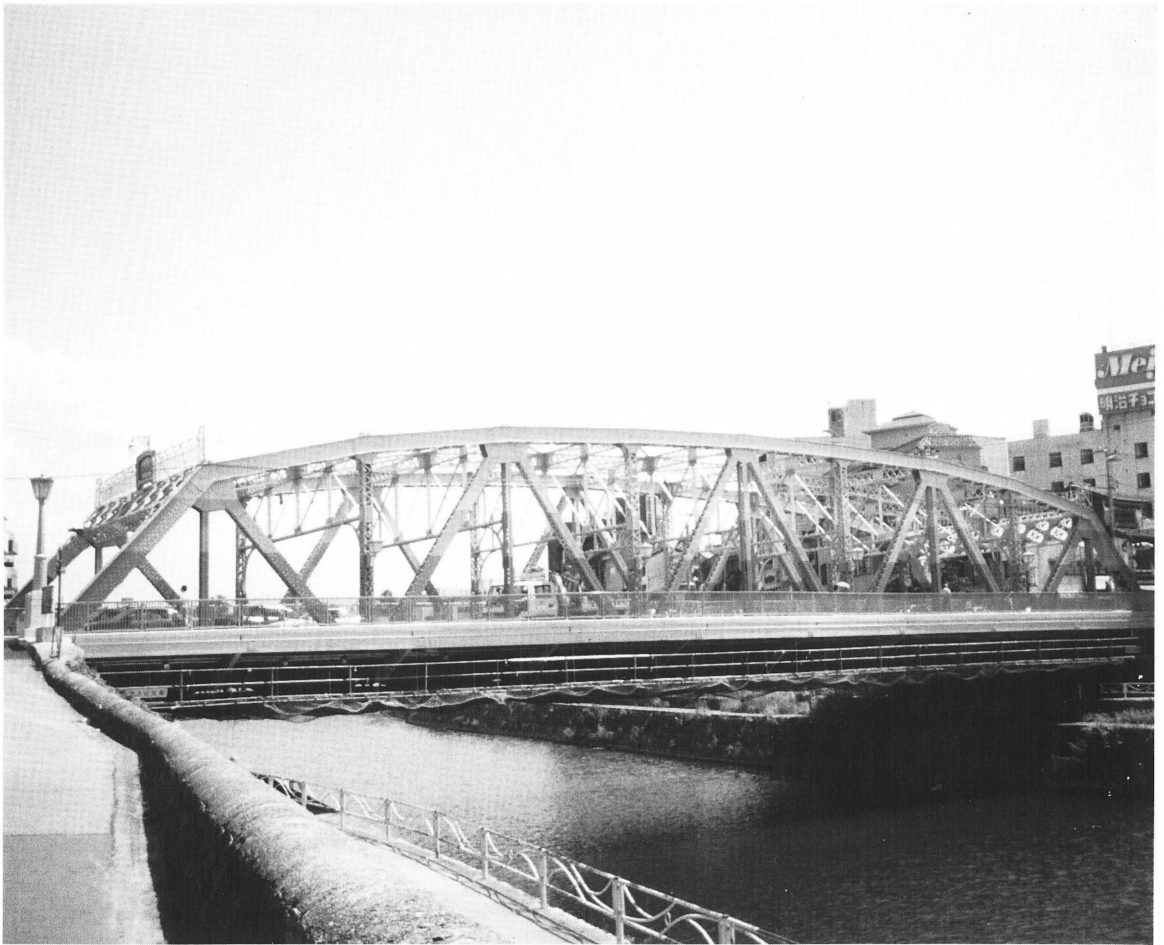
所在地：石川県金沢市

河川名：犀川

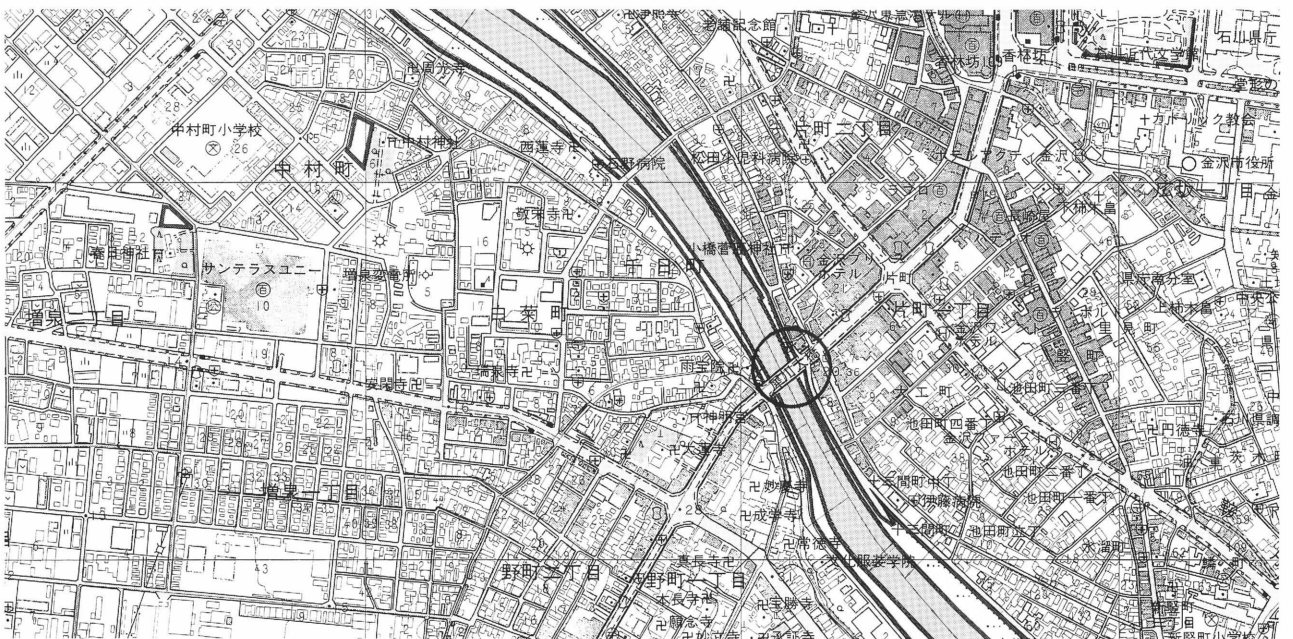
橋長・幅員：62.308m×18.45m（車道12.45m+歩道2×3.0m）

径間数・支間長：1×60.96m

形式：下路曲弦ワーレントラス



〈1994年5月，撮影・山口俊明〉



(1:10,000 金沢)